

アヤメツブノミハムシ

Aphthona yuasai Ohno

－生態と防除－

日本花菖蒲協会 顧問 久保田 栄

1. 形態

成虫は体長2~3mm。前翅は半透明の茶褐色、光線の条件により黄金色に見える時もあります。背中の中央に一本の黒い帯があります（第1図）。後脚腿節は太く、これでジャンプします。羽化直後の成虫は乳白色でやがて褐色に変化します（第2図）。



第1図 成虫
左が雌



第2図 成虫
右が羽化後間もない成虫

卵は長径0.3mm、ラグビーボール型（第3図）、ふ化直後の幼虫は細長く体長1mm、乳白色（第4図）、成熟幼虫は体長約4mm、乳白色、蛹も同色です（第5図、第6図）。



第3図 卵



第4図 ふ化幼虫



第5図 成熟幼虫



第6図 蛹

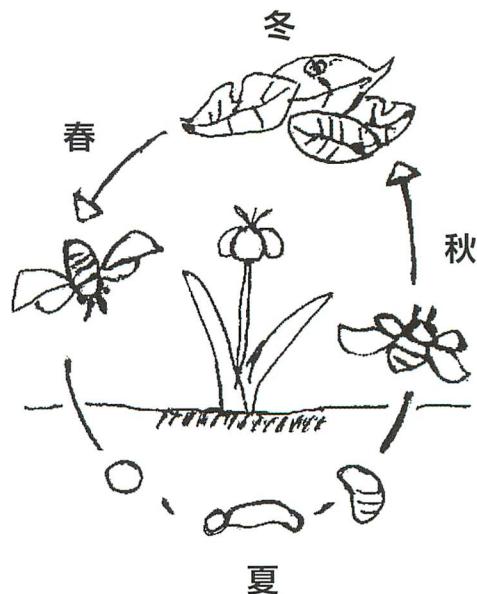
2. 生態

本州、九州に分布します。四国、本州北部、北海道からは知られていないようです。年1回の発生と思われますが、その実態は良くわかつていません（第7図）。

発育態	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
越冬成虫									?			
卵												
幼虫												
蛹												
新成虫												

第7図 アヤメツブノミハムシの発生経過

枯葉の裏や物陰で成虫越冬し、翌春アヤメ属植物の芽の伸長に合わせ飛来、葉を食害します。この時、同じ株に集合する習性があるので、被害が同一株に集中する傾向があります。成虫は地際部の枯葉などに産卵します。産卵は5月から8月まで続くので6月から10月頃まで連続的に新成虫が発生していると思われます。越冬成虫や新成虫の寿命、産卵の有無や期間等の実態については分かっていません。6月末から7月に新成虫が多く観察され、これらは越冬成虫が産んだ卵から育った個体と考えられます。10月になると成虫のみになり、周辺に飛んで移動し枯葉の下や物陰で静止し越冬に入りますが、暖かい日には摂食することもあります（第8図）。なお、暖かい場所が越冬場所として適しているように思われるがちですが、実際に越冬場所として選ばれるのは温度が低く安定し、湿度が高く安定している場所（建物や大樹の北側に積もった枯葉の下など）の様です。



第8図 アヤメツブノミハムシの生活環

3. 被害

成虫は葉の片側から葉脈と葉脈の間を食います。この時、反対側の表皮を残すので薄緑色スジ状の食害痕が残ります（第9図）。この虫にとって葉脈は硬いので、柔らかい葉脈間を食べるためと思われます。なお、このようなスジ状の食害痕は他の小型の害虫でも発生するので、診断にあたっては注意が必要です。葉脈が細く、間隔が広いイチハツでは葉脈を超えて幅広く食害されるので、激しい被害になるようです（第10図）。食害部はやがて褐変し、脱落して葉に穴が開く場合もあり、被害が甚だしい場合には葉全体が枯死します。葉の先端に近い部分を好んで食う傾向があり、食害量が多いと葉の先端部が一面に変色して見えるようになります（第11図）、アヤメ、イチハツで被害が多く、ハナショウブ、シャガ、キショウブでも被害が見られます。ジャーマンアイリスで被害を見たことはありません。幼虫は根を食害します。寄生が多いと生育不良や株の枯死が発生すると言われています。本虫の被害は畑栽培や鉢栽培で発生が多いようです。このことから、発生の多少には、栽培管理（灌水の多少）、環境条件（土壌水分の多少）が関係していると思われます。



第9図 スジ状の食害痕



第10図 イチハツの葉枯れ



第11図 アヤメ葉先端部の褐変

4. 防除

成虫は連続的に飛来するため、残効の短い薬剤の茎葉散布では効果が出にくいと考えられます。幼虫を防除対象とした防除では継続的な湛水処理により被害を回避できると思われます。

この虫はアヤメ属のみに発生します。アヤメ属の植物は野外に多くありません。つまり今ハナショウブを加害している虫はどこからか大挙して飛來したものではなく、あなたの家で生まれ育った虫である可能性が高いのです。従って、自家の防除を徹底すれば、この虫の被害はおのずと減少すると思われます。

殺虫剤の試験例はほとんどありませんが、本虫成虫に対してはスミチオン乳剤の効果が高く、オルトラン水和剤の効果が劣る試験例があります。

ところでハナショウブに薬剤を散布する場合展着剤を加用していますか？ハナショウブに薬剤を散布した時に葉の表面が濡れていなければ、それは薬液が葉に付着していない証拠です。展着剤を加用して薬剤が葉の表面に残るようにしましょう。